

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学部・1年

氏 名: 古里 孝志

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>農業関連にターゲットを絞り、そこから学んだことについて述べていきたいと思う。</p> <p>まずはじめに、サンパウロを訪れJICAの事務所へ行った。そこでは、ブラジルの概要とこれまでのブラジルでのJICAの活動について説明していただいた。農学部である私が特に印象に残っている活動にセラード地域の農業開発がある。これは、農業に適さないセラード地域の土壌改良や灌漑に、日本が資金援助・技術協力を行ったというものだ。セラード地域は東京の1.6倍に当たる34.5万haと非常に広大な土地であるが、熱帯サバンナという気候条件と作物の生育を妨げる高濃度のアルミニウムから開発以前は不毛の大地と呼ばれるほどであった。しかし、この問題を日本の協力のもと解決した。具体的には、土壌の改良や大豆の熱帯性品種の育種、多様な作物の栽培技術の改を行った。そして、現在は世界有数の農業地域であり日本はセラード地域の住民、ひいてはブラジル国民に大変貢献したといえるであろう。また、この活動を皮切りにブラジルでのJICAの評価が上昇し、様々な援助・協力依頼が増えたという。また、その評価は他国でも上昇し、現在ブラジルと気候条件が近く、セラード地域と同様の課題(土地利用)を抱えているモザンビークでの活動もスタートしている。けれども、このモザンビークの活動には活動の当事者であるJICA内から批判もある。それは、モザンビークでの活動が大規模栽培農家に利潤を生むだけで本当に支援が必要な零細農家に対しての支援になっておらず、世界中の貧しい方々を支援するための組織であるJICAの理念とは異なるためだ。そして、この活動はもともとモザンビーク側からの要請からスタートしておりモザンビークの政府としては、経済を発展させるために是非開発して欲しいものだろう。以上のような話を聞いたことから、より海外の農業というものに関心を持つようになった。特に、零細農家の方々の農業実態や、その方々への営農指導に関心が生まれた。営農指導に関しては研修終盤のアマゾナス大学での発表会でコナガノミチノリさんが発表された「アグロフォレストリー」という営農法を学び広めていきたい。アグロフォレストリーとは自然を模倣し、様々な作物を混植させ、通年の収穫や病害虫や異常気象に対するリスクヘッジを可能にし農地の生産性を高める。また、混植による有機物の確保で肥料削減、土壌の保護、生態系の保全なども可能にするという点で非常に環境にもやさしい。農業にも環境への配慮が求められる現在で生産性を高めながら、環境への配慮を可能にするこの営農法は将来性があるため、ぜひとも自然豊かな地域に住んでいる零細農家に広めたい。</p> <p>次に、この研修の目的であるキャッサバの調査について述べたい。ブラジルでは、キャッサバが食卓に上らない日はないというくらいキャッサバが食文化に根付いていた。日本の方々はキャッサバというとタピオカのイメージくらいしか浮かばないだろうが、ブラジルでは多種多様な方法で食されていた。例をあげると、切ったものをそのままスープなどに入れる、練り薄く伸ばし焼いたものに様々な具材を挟むサンドウィッチの様な食べ方(ブラジルではこれをタピオカという)、お酒、ファリーニャ(キャッサバを炒った粉、様々なものにかける、主食)などがあるが例を挙げ尽くすことができないほど利用法は多岐にわたる。これらについては実際に食したが日本人好みの癖のない素朴な味わいであった。また、キャッサバの</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学部・1年

氏 名: 古里 孝志

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
<p>生産を実際に見て話を聞いた結果、事前の徳之島での調査通り苗木が不必要(切ったものを植えるだけで収穫できる)であり、痩せた土地でも生育していたため、栽培は容易であるといえるであろう。以上の2点から、日本での生産を行う価値は十分にあると考える。しかし、キャッサバ特有のシアン系の毒を取り除く過程が想像以上に大変であった。具体的には、数日間水にさらす、その間何度も水を変える、加熱する、天日干しなど多くの行程があり、時間もかかる。この点をどのようにするかが日本でキャッサバを生産する上でネックとなるだろう。今回の研修では日程の都合上キャッサバの加工工場見学を行えず、この行程をどのように大規模化しているのか調査できなかった。この点が今回の研修で唯一の心残りだ。</p> <p>最後に、今回の研修を通して農業に対してのグローバルな目線を養うことができ、また生産性だけでなく生産者の労働条件・社会的状況や生産後の加工・流通までを考えられるようになった。これらのようなものは、グローバル化が進んでいる現代の農業において必須の考え方であると思う。今回の研修を通して学ぶことができ本当に良かった。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>まずはじめは、徳之島のキャッサバ生産農家の方々に調査したキャッサバの料理・加工法、輸送・保存法、栽培・収穫法をフィードバックしたいと思う。そのために、もう一度調査内容を整理し、さらなる情報收拾を行いたい。また、11/3の報告会で調査内容、ブラジルの素晴らしさ、南米研修参加のメリットをわかりやすく伝えられるよう発表の準備に素早く取り掛かりたい。</p> <p>次に、今回の研修からブラジルに留学したいという思いが芽生えたため、留学の準備を行いたい。特に、研修期間に痛感した言葉の壁を乗り越えられるようポルトガル語の学習に取り組みたい。具体的には、今回の研修で交流が深まったアマゾナス連邦大学の友人たちとSNSでポルトガル語を介してコミュニケーションを図り、現地の方が使う生きたポルトガル語を学びたい。また、留学先では今回の研修で興味を持った「アグロフォレストリー」について学びたい。実際に留学するまでには期間が一定程度あるため、その間に「アグロフォレストリー」の知見を広めたい。</p> <p>最後に、この研修はコミュニケーション能力、グローバルな考え方など、これから生きていく上で必須のスキルや考え方を身に付けることができる素晴らしい研修であった。この研修での経験を私個人で享受するのではなく、積極的な情報発信を行うことで、多くの方と共有していきたいと思う。そして、そうすることこそが本当の意味での学習になるのではないだろうか。南米研修で関わった全ての方々に感謝し、私自身の成長した姿を見せるという形で恩返しをしたい。</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部2年

氏 名: 田中 優成

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回の南米研修では自分が思っていた以上に素晴らしい経験ができて、さらに自分を成長させることが出来たと感じている。ブラジルのサンパウロでは初日にJICAの佐藤さんのお話を聞くことが出来た。その中でJICAのブラジルでの取り組みを学習させて頂いた。具体的には都市問題と環境防災対策ブラジルでは主に集中豪雨などである。他にはJICA日系社会連携事業として人材育成、民間連携を行っているというお話を聞くことが出来た。夜には鹿児島県人会の皆さんと食事を混じえながら交流を深めることが出来た。翌日には、東山農場を見学した。東山農場は1798年11月20日設立され当初、さとうきび畑だったその時に使われたのが黒人奴隷だった。1915年になった時にコーヒーがもたらされたコーヒー豆の栽培方法やその加工方法を見学できた。またその中で日本の移民が深く関わっているということを学ぶことが出来た。その中で、実際に豆とゴミを分別する作業などを体験させて頂いた。翌日はサンパウロの市場を訪れた。そこではブラジル独自の料理や野菜、お酒があり刺激になった。その後は博物館に移動して、ブラジルの黒人奴隷の歴史を風刺した作品やメッセージ性のある作品を鑑賞し、自分の中の考え方が変化したと感じた。その後はブラジルでも有名な作家ミウトン・ハトゥンさんの自分がどのようにして作家になったのかまた若い頃のエピソードや、自分達の勉強になる考え方などを聞くことが出来た。次の日から数日間はマナウスに移動して、現地のホームステイ先のひとと交流を深めながらブラジルの文化や慣習を学ぶことが出来た。その中でも特に印象が残っていたのは、日本よりも非常に家族を大切にしていたということである。また、現地の大学生と一緒にブラジルのアマゾナス劇場を見学したりやアマゾン川沿いの市場を見学したりなどして深く交流を深めることが出来た。次の日には、ブラジルの日本領事館を訪れ、総領事館の関口さんのお話を聞くことが出来た。ブラジルにおいてもサンパウロとマナウスでは地域性が全く異なることや、マナウスの活性化にはどのようにすべきか、またマナウスにおける日系ブラジル人同士の交流はどのようにしているのかなどの貴重な話を聞くことが出来た。その夜には現地のアマゾナス連邦大学にて、鹿児島の離島について発表を行い、自分としても海外において大人数に対してプレゼンテーションを行うことが滅多にない経験になって良かったと感じている。以上のような日本では出来ないような貴重な体験をすることができて、私は人の話を聞く態度や集団行動における立ち回りなども改善した。特に現地の大学生と交流した事で、ポルトガル語を勉強したいという学習意欲も高まった。特にブラジルについてもっと知りたい、またブラジルに行きたいと思うようになったことなどが私の今回の南米研修の成果であると感じている。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回の南米研修を終えて、私はもっとポルトガル語を勉強したいという気持ちが表れてきた。それは海外、それもブラジルで友達が出来たということが大きな要因であると考えている。やはりこの南米研修に参加したことでこのような考え方や気持ちが出たと思うので、これからはもっと情報発信を行い、ほかの学生がもっと海外に向けられるように私も努力していきたいと考えている。</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部法経社会学科地域社会コース・2年

氏 名: 江口 京香

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>まず初めに、サンパウロでの活動と成果をまとめていきたい。サンパウロ初日は、JICAブラジル事務所に訪問した。研修前にJICAで現在働かれている方の話を聞いたことがあったため、元々関心があった。都市環境問題・防災対策と投資環境改善などといった様々なプロジェクトを行っていることが分かった。私は特に「中南米・カリブ次世代知日派リーダー育成プログラム」が印象に残った。このプログラムは、日本の価値観を共有するブラジル人のリーダーを育成することと、良好な日伯関係を構築・維持することを目的としたものであった。日本社会と文化に理解を持つ次世代知日派の育成と企業の基盤強化・人材育成が同時に可能になるという日本とブラジル双方にとって良い人材育成プログラムであると感じた。</p> <p>東山農場見学では、奴隷小屋や移民が利用した売店、コロナ住宅などの19世紀の古い建築物などを拝見した。奴隷が足で作った形のまばらな瓦や古い材木といった資材等も見ることができた。それらに加えて、コーヒー栽培の歴史と収穫までの流れについての話を伺った。当初コーヒー栽培の労働力は主に奴隷によってまかなわれていたが、1888年の奴隷解放制度による労働力不足を機に、移民を雇用し労働力を充足するようになったということが分かった。1929年の世界恐慌の際はコーヒーも経済的打撃を受けたが、東山農場は多品種で対応し打撃をそこまで受けなかったという話が印象に残った。実際の栽培の流れについては、収穫しやすいように木の高さを調節したり、収穫した実の臭みを無くしつつ干す期間を短縮できるよう、収穫した実を土の地面ではなくアスファルトの上で干したり、様々な工夫を知ることができた。</p> <p>日本移民資料館訪問では、ブラジルに渡った日本移民の歴史について深く知ることができた。移民契約書や日伯修好通商航海条約の写し、第一回ブラジル移民として781名を送り届けた笹戸丸の模型が展示されていた。他にも移民の生活用品や、絵画・書物を見て移民の歴史を文字から得られる知識としてだけではなく、目で見て知ることができてよかった。「エルドラードの孤児」などの著者であるMilton Hatoumさんとの面会では貴重なお話を沢山聞くことができた。</p> <p>次に、マナウスでの活動と成果をまとめていきたい。アマゾン川クルーズでのピラルク釣り体験や野性生物の見学、アマゾナス劇場の見学など様々な貴重な体験ができた。マナウスでは5日間のホームステイがあり、ブラジルの生活文化に直接触れることができ刺激的な日々を送ることができた。ホストファミリーの母と祖母は日本語が分からず、私もポルトガル語が話せなかったため、相手のしぐさや表情にかなり注目し、自分自身もジェスチャーを使ってのコミュニケーションを取った。</p> <p>総領事館訪問では、総領事館の役割について知り、その中の1つである日本文化の広報・伝承が特に印象に残った。日系移民同士はもちろん、日系移民とブラジル人の交流があるということはとても良いことだと感じた。</p> <p>アマゾナス連邦大学で、鹿児島・離島の教育についてのプレゼンテーションを行った。今まで大勢の前でのプレゼンテーションの経験がなかったのでとてもいい経験になった。研修</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部法経社会学科地域社会コース・2年

氏 名: 江口 京香

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
<p>前に何度も作り直しをしたが、それでも反省点が多々あった。声の大きさや姿勢といった発表の仕方やモデル聴衆を設定した上でプレゼンテーション資料を作成することの重要性など、今後活かしていけることを学ぶことができた。アナヴィリーニャ国立公園では、ボートで広大な敷地内を探索し、ナマケモノ、カエル、ワニの子どもなど様々なアマゾンの動物を見たり、根が横に張っているたくさんの木々からなる森を散歩したりすることができた。キャッサバの調理過程も実際に見ることができ、タピオカになるまでは、実を削り水につけて絞り、毒を抜き、圧搾機に通し加熱し、水で3回洗うというかなりの工程があるということが実感できた。シコメンデス生物多様性院訪問では、組織の主な活動と抱える課題と生物多様性保護についての話を伺った。環境と生物の保全、持続可能な範囲で教育や観光での利用が主な活動内容として挙げられた。そして課題として違法伐採や動物の密輸、ゴミを捨てる悪質な観光客の存在などがあった。広大な土地の中で違法伐採を監視する人が1人しかいないということがとても衝撃的だった。また、国立公園の周りには50ものコミュニティがあり、連携方法として評議会や講義を行っているようだ。地域の人達と環境に関する教材を作るワークショップというものが特に印象に残った。また、ピンクイルカを中心に生物多様性保護について学んだ。ブラジルに来て様々な動物と出会い、その時私はただ感動するだけであった。動物との過度の触れ合いは人間との境界線を無くしてしまうということが分かった。</p> <p>最後に全体を通してのまとめを行いたい。このブラジルで経験したすべてのことが自分にとって貴重であった。研修参加前と比べて、新たに興味を持った分野が出来て学びの幅が広がり、この研修に参加したことを心から良かったと思う。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>この研修を通して、長期間の留学に興味を持ったと同時に、自分の言語力の低さを実感した。大学2年生になってから英語の学習が格段に減ってしまったため、また再開したい。英語の復習と同時にポルトガル語の学習も平行して取り組んでいきたい。また、私は10月からホームステイ先の学生のチューターを務める。あまり時間はないがポルトガル語を勉強して少しでも成長した自分の姿を彼女に見せたいと思う。</p> <p>キャッサバについても、調理方法やそして、この研修をきっかけに日系移民の歴史に強い関心を持った。今後個人的に学習を進めていきたいと思う。</p> <p>また、自分の一番の課題は、きちんとした場での話し方と聴き方であると感じた。JICAや総領事館、シコメンデス生物多様性保全院などに訪れ、緊張しながら自分の意見を述べる際にその実態に直面した。話し言葉が出てしまったり、姿勢が崩れてしまったりと多くの反省点が見つかった。これからその反省点の改善に取り組んでいきたい。ブラジルに滞在した期間はとても短かったが、沢山のことを体験し、知ることができ、素晴らしい経験が沢山できた。この研修で学んだことを周りに発信していくことも自分の役割であると考えている。</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理学部物理学科・4年

氏 名: 佐藤 研治

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>サンパウロではJICAのブラジル事務局を訪問し佐藤次長の話を書いた。JICAが行なってきた現在のブラジル社会ができるまでの功績を学ぶことができた。どのプロジェクトも興味深いものであった。インフラの整備、都市環境改善、留学プログラムなどその中で私がおもしろいと感じたことは治安改善のためのプログラムで日本の交番をモデルに地域を整備するというもの。ブラジル人の警察のイメージに怖いというイメージが根強くついているものを払拭する意味も込めてのプロジェクトだと佐藤次長は仰っていた。現在は終了プログラムとなっていたが日本独自の制度を取り入れることでブラジルの社会発展につながるというのはとても魅力的なプログラムだと思った。JICAブラジル事務局の功績や事業を詳しく学ぶことができた。日本移民資料館および東山農場見学では日系ブラジル人の歴史や文化、価値観またコーヒー農場の成り立ち、日本人の功績者について学ぶことができた。日本移民資料館では当時の日本人がブラジルに持ち込んだ文化が展示されており、私の想像していた以上に日本の文化が当時のブラジルには浸透していたのだなと感じた。また、世界の移民はまず移民の教会をつくることを日本人の移民は第一に学校を作ったというエピソードには関心させられた。日本の教育に対する重要度というのを感じられた。東山農場では日本では見ることのできない大規模な農場を目の当たりにし圧巻であった。また、農場内には資料館があり、東山農場の歴史やブラジル国内でのコーヒー農場の発展の経緯、Raimundoさんによるコーヒー豆の収穫の実演などを見ることができた。マナウスではアマゾナス連邦大学日本語日本文学科の学生の家庭にホームステイをさせていただいた。マナウスはサンパウロとは街並みが大きく違い、発展しているところとそうでないところの差が大きくみられた。私のホームステイ先では親戚一同が同じコミュニティに属しており、現代の日本ではあまり見られない光景であった。家族間の距離が非常に近く私にとって新鮮な体験であった。また、ホームステイ先の学生は仕事をしながら学生をしており、仕事の日には私は彼の彼女と行動を共にした。彼とは日本語で彼女とは拙い英語でそして家族とはポルトガル語で会話をしなければいけなかった。非常に良いトレーニングになったと実感している。ブラジルの食べ物や習慣などを彼らから身を持って体験させていただいた。アマゾン川クルーズでは先住民やピンクイルカ、ピラルク釣り体験などアマゾンでしか味わうことのできない貴重な体験をさせていただいた。しかし、それぞれにはバックグラウンドがあり、例えばピンクイルカは絶滅の危機に瀕している。それに伴いピンクイルカとのふれあい方には厳格なルールがあった。それを保護しようとする組織の働きや個人単位の運動にも触れることができた。そういった背景を学ぶことは直接見て話を聞かなければ学べないことで貴重な経験になった。アマゾナス連邦大学でのプレゼンでは我々生徒は初めて日本語があまり伝わらない相手へ発表をするということでも戸惑った。言葉があまり伝わらないということでスライドのクオリティーが求められた。また日本語の設定レベルも下げる必要があった。今までのプレゼンの悩みとは違う課題があげられた。プレゼンの結果としてもとても良い経験をする事ができた。Anavilhanasでの国立公園探索では今回の事前学習からのテーマで</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 理学部物理学科・4年

氏 名: 佐藤 研治

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
<p>あったキャッサバの栽培方法を見て体験することができた。私は事前学習の徳之島調査に行くことができなかったのでキャッサバの栽培過程を見たのは初めてであった。キャッサバは毒を抜かなければ食べることができず、食用にする工程はブラジル独特のものであった。同じ食べ物でも栽培環境がここまで違えば方法も変わってくる。しかし味はそこまで変わらない。この経験を徳之島にしっかりフィードバックしたいと思う。今回の研修を通して私はあらゆる分野に視野を広げることができたと感じている。専門分野ではない日系移民、キャッサバ栽培、ポルトガル語など新しい刺激が随時与えられ非常に勉強になった。これは自分の専門分野にも必ず通じるものがあり、それをしっかり反映させていきたいと思う。</p>	
<p>[研修後の抱負]</p> <p>JICAでの講話は私にとってとても貴重であり、今後の将来の選択肢を広げるものとなった。研修前よりもさらに海外に目を向けるようになり、語学勉強や海外文化に興味を持つようになった。日系ブラジル人の背景を知ることで単純に日本人の子供、2世3世であるといった稚拙な視点ではなくて、なぜ日本人が遠いブラジルに移民したのか、そこでどのように生活していたのか差別を受けていたのかまた、なぜ見た目と文化が違うからといってブラジル人、日本人から日系人は差別を受けなければいけないのか多くのことを考えるきっかけになり、多くのことを学んだ。これは日系人に限らず肌の色といった見た目での差別は世界中で起こっている。そのような社会問題にも興味を持つようになった。マナウスでの経験は私の人生の中でもとても大きなものとなった。ホームステイ先の学生も日本語を習いたてであまり通じなかった。そんな中でどのようにコミュニケーションをとるかというのがとても勉強になった。ジェスチャーを入り交ぜたり顔の表情であったり相手の気持ちを察しなければならぬ環境であった。私はこの経験から言語を学びたいと強く思った。言葉がわからなくてもコミュニケーションは取れるという自信と同時に言葉がわからなければやはり踏み込んだコミュニケーションが取れないという悔しさも学んだ。なのでポルトガル語を学びたい気持ちもあるがまずは英語から学びなおしたいと思う。それはこれまでやって来た勉強とは違い生きた英語を学ぶように心がけたいと思う。実践的な場面があれば私は率先して参加する意欲は現在ある。将来的にはポルトガル語を学び、再びブラジルを訪れたいと強く思うようになった。また、上記に記したような研修で得た成果は事後学習だけに生かすだけに留めず他の学生や友人知人に多く情報発信していきたいと思う。ブラジルという一般的な日本人旅行者が少ない地での経験は非常に価値がありそういった人々の興味も引くことだと思う。私ができる最大限の情報発信をしていきたいと思う。また、この貴重な研修を継続するためにも後輩たちへの引き継ぎにも力を出したいと考えている。</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部・2年

氏 名: 浦本 ゆかり

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>今回の研修を通して得たことが大きく分けて2つある。1つ目は自分の進路に関する目標を得ることができたこと、2つ目は他国の歴史や異文化を理解するためには実際に見て体験しながら学ぶとともに、現地の人と関わりを持ちながら学ぶことが重要であると学んだことである。まず一つ目に関してであるが、サンパウロでJICAを訪問し実際に話を聞いたことで自分の考えが変わった。自分は国際協力関連のあらゆる分野に興味はあるが、具体的に何を学ぶべきかが決まらずにいた。しかし、実際に話を聞いたり質問したりしたところ、文系の分野で役に立つ分野が多くあることを知った。例えば、幼児教育や社会教育、コミュニティ開発、観光開発、日本語教育などである。自分はこの中で社会教育、日本語教育に興味を持ったため、現在大学で学んでいる専門分野の学習を深めるとともに、現在学んでいる英語と中国語の向上という具体的な目標を得ることができた。また、マナウスのシコメンデス生物多様性保全院でアナヴィリャーナ国立公園が抱える環境の問題についての話を聞いた際に、以前から環境系の話題に関心はあったため今回より学びたいという思いを深めることにつながった。また、2つ目に関してであるが、大学の授業や講義中の資料、インターネットの資料などで日系移民の歴史や黒人の奴隷制、コーヒー栽培について学んでいたが、日本移民資料館や、黒人奴隷に関する資料見学、コーヒー農場、キャッサバ栽培などを学ぶ際に現地の方が丁寧に説明をしてもらえたことで、学んでいたことをより深く理解できた。また、聞くだけの知識よりも実際に見に行き体感する知識の方が身につくということを実感できた。また、ブラジルの文化について知る際にも、ホームステイ先の学生たちと関わる中で表面だけでなく深い部分やよりローカルな部分まで知ることができた。研修に行く前は、ネットの情報で得られるその土地の気候や食べ物、宗教などを知ることで異文化を理解したつもりになっていたが、それは全く違うことだと気づかされた。基本的な情報を知ったうえで、それらのものが現地でどのように根付いているのかを日常生活の背景とともに知ることが大切であり、やはりそれは現地の方に直接聞くことが必要であると感じた。今回の研修で大きく分けてこれらの2つのことを学んだが、自分の進路決定やこれからの物事の見方の変化につなげることができたと思う。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回の研修から得られた今後の抱負として挙げられることは、語学力の向上と専門分野への知識を深めることである。語学力の向上を抱負とした理由は、ブラジルでの日本語教育の様子をみたこととホームステイ先の学生たちの日本語力に圧倒されたことから、自分の英語と中国語におけるスキルの低さを実感させられたとともに希望の進路を決める際に必要になってくるであろうと予測されるからである。また、JICA訪問によって専門分野である社会教育や経済の知識も今後活かすことができると考えたため、語学力だけでなく、まず専門分野の知識から深めていきその後より幅広い物事の見方ができるようになるための土台となるように学んでいきたいと思う。</p>	



## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部・2年

氏 名: 池田 りお

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>今回の南米研修では、サンパウロ州とアマゾナス州に訪れ、その土地の文化に直接触れることで、歴史、農業、自然、多文化理解など様々な面においてブラジルへの理解を深めることができた。</p> <p>最初に訪れたサンパウロ市は、ブラジル経済の中心都市であり、ブラジル最大の日系移民都市でもある。私たちのお世話になった宮城県人会や鹿児島県人会の位置する日本人街をはじめ、街の至る所で日本とブラジルとの繋がりを感ずることができた。日本移民史料館では、ブラジルの社会と文化の授業で学んだ日系移民の歴史を復習するとともに、新たな気づきを得ることができた。日系移民がブラジルへもたらしたものは、農業における安価な労働力だけではない。教育という分野においてもまた、大きな影響を及ぼした。日本人の勤勉さだけでなく、他文化及び多文化を柔軟に受け入れようとするブラジルの気風があったからこそ、ここまでの日系コミュニティが発達したのである。JICAの取り組みとしても、日系社会の民間ネットワークと連携した活動に力を入れているということであった。日本が行う協力分野として主なものに防災がある。中でも自然災害や地域警察の活動経緯についてのお話を詳しく伺った。自然災害に対する防災は日本でも大きな課題の一つである。JICAの活動は一方的な国際協力援助ではなく、支援する側される側両方における学びの場であるのだと感じた。</p> <p>カンピーナス市では、大都会の風景から一変し、高原や農地が広がっている。この町にある岩崎氏の経営する東山農場では、コーヒーの歴史や栽培方法について学習し、900ヘクタールにも及ぶ広大な農地を見学した。ここでも日系移民である山本氏のコーヒー病原菌の研究における活躍について学ぶとともに、黒人奴隷やイタリア系移民の歴史についても学ぶことができた。また、レイモンドさん指導の元、コーヒー豆と落ち葉との仕分けを行う作業を体験させて頂いた。</p> <p>次に飛行機でアマゾナス州のマナウス市に訪れた。ここでは、アマゾナス連邦大学日本語学科の皆様方にお世話になった。私のホームステイ先のミカエラさんは日本のアニメや音楽が大好きで、日本についてとても詳しい方であった。日本語も非常に流暢であり会話は日本語で行った。渡伯する前、マナウスといえば、アマゾンの森林地帯というイメージがあったのだが、実際はビルや建物の立ち並ぶ都市であり驚いた。ネグロ川沿いの市場では、日本では決して見られない珍しいお土産や食べ物ばかりであった。印象的であったのは、マナウスではサンパウロとは違いアマゾンの自然の恵みをそのまま生かした物品・食品が多く見られた点である。アマゾン川クルーズでは、先住民の方々にお会いすることができ、改めてブラジルの多文化社会的側面を感じられた。マナウスからそう遠く離れていない土地で、独自のコミュニティを築き、伝統的な暮らしをしている民族が今でも実在していることに対して感動を覚えた。総領事館への訪問では、マナウスについてさらに多くを知ることができた。内陸部に位置するマナウスは、ブラジルの都市の中でも日系移民が少なく、わずか2万6千人ほどである。しかし、日本とマナウスの繋がりに関しては、ブラジル北部を指揮</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部・2年

氏 名: 池田 りお

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾン連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾン州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
<p>する総領事館があったり、UFAMの日本語学科があるところから窺い知ることができる。関口氏が仰っていたように、マナウスと日本との交流の機会を増やすことで、サンパウロやリオなど有名な南東部だけでなく、ブラジル北部についても日本人にもっと知ってもらうことができるだろう。</p> <p>最後に訪れたのは、マナウスからさらにアマゾンの奥地へと踏み入ったノヴォ・アイラオ市である。これまでの都市の風景とは異なり、本当に小さなコミュニティから成る町という印象を受けた。ここでは、アナヴィリャーナス国立公園をポートで探索した。アマゾンには野生動物の宝庫だけあり、ナマケモノ、ワニ、イグアナ、アララと呼ばれる鳥など多くの生き物を見ることができた。また、キャッサバの調理方法を間近で観察することができた。キャッサバには青酸の毒があり、毒抜きが必要であるのだが、キャッサバを摩り下ろし、水でさらし、絞り、大きな釜で加熱する一連の工程を観察させて頂いた。ブラジル最終日には、シコメンデス生物多様性保全院に訪れ、組織が行なっているアマゾンの保全活動についてのお話を伺った。主な活動内容としては、保全と持続可能な範囲での利用。保護地区内での違法行為をたった1人で取り締まるなどの現状から、組織自体の人員を増やすことを課題としているとのことである。アマゾンという広大な面積の環境保全を行うには、多くの協力が求められるため、地域住民やNGOなどの他組織との連携が必要になってくるだろう。</p> <p>1年の後期に「ブラジルの社会と文化」を受講したが、私はこの授業で歴史的な面である日系移民について印象に残っていた。そのため研修の成果としても、主に日本とブラジルの繋がりについて重点的にまとめた。しかし、この研修ではそれだけでなく、ブラジルについて非常に多くのことを学ぶことができた。特に農業という分野において、現地のコーヒーを飲んだり、キャッサバからできるタピオカを食べることによって更なる理解が深まった。また、UFAMの皆様をはじめ、ブラジルで出会った多様なバックグラウンドを持つ方々との交流もとても良い経験になった。たくさんの横の繋がりができるだけでなく、グローバルな視野を持つことができるようになった。多くの出会いに感謝するとともに、この研修を通してブラジルという国を今まで以上に好きになることができたと心から感じている。</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 法文学部・2年

氏 名: 池田 りお

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
〔研修後の抱負〕 今回の南米研修で私はずっと憧れていたブラジルに始めて訪れ、様々なことを学んだ。しかし、まだこの国において知りたいことは多くあり、今回は訪れることの出来なかったリオやサントス、ベレンといった都市にも行ってみたいと考えている。今回の研修では引率の酒井先生の通訳や、日本語の得意であるUFAMの皆さんのおかげで言語の壁に直面することなく研修を終えることができた。しかしブラジルはポルトガル語圏である。日本語は勿論のこと、英語も通用しない。そのためポルトガル語を習得することが私の中での目標となった。 またこの講義では、徳之島のキャッサバを活用した地域活性化プロジェクトというものがもう一つの大きなテーマとなっている。私は徳之島の事前調査に参加したのだが、キャッサバに関してはやはり日本よりも、古くからの原産地であるブラジルの方が調理方法や生産量、認知度などが上であるようだ。持ち帰った知識を徳之島の皆様と共有し、地域活性化へと繋げていきたいと考えている。 日本人において、ブラジルというと治安が悪いというイメージが先行しているように感じる。私自身、南米研修参加に当たって母親にひどく心配された経緯がある。研修期間であった10日間は、ブラジルを理解するには短すぎる。それは、ブラジルという国の持つ光の部分、陰の部分どちらにも言えることである。しかし、短いながらも私がブラジルにおいて経験したことは紛れもない事実である。ブラジルをあまり知らない多くの日本人に私の目で見ただけのままでのブラジルを伝えていきたい。	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 教育学部・4年

氏 名: 中山 雄太

授業科目名	南米における進取の気風研修計画
研修先(国・地域) 滞在地	アマゾナス連邦大学 他(ブラジル連邦共和国 サンパウロ州、アマゾナス州)
研修期間	平成30年9月2日～平成30年9月15日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>サンパウロではまずJICAの事務局を訪問し佐藤次長のお話を聞いた。治安問題、都市問題、日系社会問題、環境・防災対策、地域警察活動をはじめ、様々なことについてお話して下さった。中でも印象的だったのは次世代の人材育成についてのお話である。JICAは次世代の日系社会を担う中高大学生を含む日系人の本邦での研修の実施等より、日本とブラジルとの架け橋になりうる人材育成に協力している。現代の課題解決に努めるだけでなく、後世をも見据えた後継者育成活動はますますJICAの事業の中でも重要な位置付けになってくると考える。農業をはじめとするさまざまな分野でブラジルの発展に大きく貢献し、日本や日本人に対する確固たる信頼感が築かれてきたのは、まさしく日系人のおかげである。この事実を忘れることなく、ブラジルとの信頼関係をさらに深めていく必要がある中で、今回のような次世代の人材育成に関わる事業は今後大きな期待を持たれることになる。そのため、これを確実にサポートできるような体制を整えることこそが日本とブラジルの両政府に求められることになるだろう。両国のますますの発展を願い、持続可能な開発が実現するよう努力をし続けるJICAの具体的な活動を今回直接学ぶことができ良かった。</p> <p>また、サンパウロの隣にあるカンピーニャス地方の東山農場に行き大規模なコーヒー農園を見学した。農場では東山農場の歴史、ブラジルコーヒーの歴史をはじめ、土地を開拓し、農耕開始のために働かされていた黒人奴隷の当時の暮らしの様子などを学ぶことができた。私自身就職先が某コーヒーメーカーに決まっていたので、今回ブラジルで歴史のある大規模農園に足を運ぶことができて感激だった。東山農場の標高は600～700mあり、昼夜の寒暖差が大きい土地を生かして甘みのあるコーヒーを収穫することができる。実際に試飲させてもらうとまずフルーティーな香りが口の中に広がりその後にはコーヒーの苦味、そして濃いめの酸味で味を引き締めている感じで非常に美味しかった。東山農場のコーヒー栽培を支える方々にもお会いすることができ、私たちが日頃美味しいコーヒーを飲むことができているのも彼らの努力があっこそだと思うので、生産者を感じながらこれからもコーヒーを楽しみ、そしてその魅力を次はプロの立場として伝えられたらと思う。</p> <p>サンパウロでは他にも日系移民資料館に行き日系移民の歴史、当時の生活を学んだ。正式に移民を開始した1908年、東洋汽船の「笠戸丸」でサンパウロのサントス港へと向かった初期移民はブラジルでの高待遇を期待して海を渡った。しかし、実際は先に移民として来たイタリア人同様に日本人も法律上の地位こそ自由市民であったものの、一部の農場を除きその実情は奴隷と大差ないものだったという。あまりの待遇の悪さにストライキや夜逃げも多く発生し、近隣の州やアルゼンチンへと渡る者もいたようで、いかに厳しい生活を強いられていたのかを知った。それでも日系移民は自分たちで資金を出し合い共同で農地を取得し、1919年に初の日系産業組合として「日伯産業組合」を設立し、胡麻や紅茶栽培で大成功を収めた。現在ブラジルで栽培されている農産物の多くに日系移民が関わっており、ブラジルの農業発達に大きな貢献をしている。ブラジル人にとって日本が身近に感じるのとは彼ら日系移民のおかげでもあるということを感じてはならないと感じた。</p> <p>私たちはその後サンパウロを後にしてアマゾンの基点となるマナウスへと向かった。マナウスではアマゾナス連邦大学に通う日本語学科の学生の家にホームステイさせてもらった。ホームステイ先ではブラジルの定番の朝ごはんやコーヒーをいただいたり、1日に何度もシャワーを浴びたりなど、ブラジリアマゾンならではの生活を経験することができた。日本語学科のみんなと過ごす時間は想像以上に濃いもので、彼らが</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 教育学部・4年

氏 名: 中山 雄太

最大のおもてなしをしていただいていることも毎日感じる事ができ、日本語の練習として頑張ってお話を聞いていただいていることも十分に伝わった。日本を好きになって、日本語を学んでいただいていることに対して、日本人として非常に嬉しい気持ちになるし、同世代の外国人がこれだけ積極的に学ぼうとする姿勢を見て私自身刺激を受けた。彼らには本当に感謝の思いでいっぱいである。

また、マナウスでは総領事館を訪問する機会があり、総領事の関口さんご本人から、地域で活躍されている在留邦人の安全確保、経済発展に貢献されている日本企業の活動の支援、日系社会との連携強化など、両国関係にまつわるお話をいただいた。特に印象的だったのはブラジル初の公立学校で日伯両語で授業をするバイリンガル校が存在し、多くの若者が日本語を学んでいるというお話で、ますます日本とブラジルの協力関係が深まっていくことを期待すると同時に、もっと日本人にもブラジルのことを知ってもらいたいと感じた。

そして今回の研修のメインイベントでもある鹿児島島の離島を発信するプレゼンテーションでは、試行錯誤しながら準備してきたプレゼンをアマゾナス連邦大学の日本語学科の学生をはじめ、さまざまな方に聞いていただいた。私たちのグループは「島の自然を生かした観光の活性化」ということで、屋久島や奄美大島、徳之島などのそれぞれの島の特性を生かした観光ツアーを提案するプレゼンを作成した。発表自体はまだまだ反省すべき部分も多々あったと思うが、それぞれの個性を生かしたベストな発表ができたように思える。

最終日にはマナウスからバスで4時間ほどのノヴォ・アイラオ市に行き、ブラジル環境省の下部組織である「シコメンデス生物多様性保全院」のスタッフからアナヴィリャーナ国立公園やブラジルが抱える環境問題に関する講義をしていただいた。公園内には森林伐採や漁の禁止などいくつかのルールが定められていたが、やはり違法を犯す人も存在するというので、人為による被害を防ぐなど、いかにして環境保全維持をしていくかを学んだ。まだまだ課題は山積みのように思えたが、政府がもっと環境維持にお金を回すべきだという生の声も聞くことができた。また公園内には約50ものコミュニティが存在しており、そのうちの一つにお邪魔させていただいた。そこではマンジョッカをはじめとしたさまざまな農作物を自分たちで栽培して自給自足するという生活を垣間見た。世界遺産の国立公園内で暮らしていることもあり、コミュニティの住民たちは環境保全への意識も高いようで、案内してくれたガイドの方々もゴミ拾いをしながら私たちを案内して下さった。環境保全がどれだけ大変なことで重要なものなのかが実際に足を運んだことでより「リアル」に感じる事ができた。私たちにできることなんてほとんど無いようなものだが、今回学んだことを私たちの言葉で伝えることはできると思う。ブラジルだけじゃなく、日本含め、世界中でもっと多くの人々に環境の意識レベルを上げてもらい、ポイ捨てをやめたり、森林伐採などの違法行為を行わないといったような私たちにもできることをやっていかなければならないと思う。

マナウスでのみなさんとの出会いをはじめとした一つひとつの経験が私の中では財産になっている。多くの方々の愛を感じられる研修になったし、これからの人生の肥やしともなる貴重な2週間を今回過ごすことができた。研修の準備をして下さった指導教諭である酒井先生をはじめ、研修に関わって下さった多くの方々に感謝を申し上げたい。

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 教育学部・4年

氏 名: 中山 雄太

### 〔研修後の抱負〕

今後の抱負として、まずはブラジルで学んだことを、事前調査でも訪れた徳之島みなさんにフィードバックをしたいと思う。徳之島のキャッサバとブラジルのマンジョッカの比較から、今後徳之島のキャッサバ栽培に少しでも役に立ったり、農家の方々の励みになればと思う。個人としては、ポルトガル語に興味を持ったので今後ポルトガル語を学んで、再び自分の力でブラジルに足を運んで、今回お世話になった日本語学科のみんなに会いに行きたいと思う。また、コーヒーについても再度学びを深めて、もっともっとブラジルコーヒーの魅力を伝えられるように勉強し続けたいと思う。

実際に行ってみないとその土地の「リアル」というのは感じられない。ブラジルという日本の裏側に存在する想像のつかない異国の地が、私の人生の中でかけがえのない思い出の地になったのは言うまでもない。来年度以降、この研修に参加する学生が増えてくれるように私たちもしっかりとフィードバックをしていきたいと思う。少しでも南米研修に興味のある学生へ、「行かないと後悔するよ」。